

叙事詩とナショナリズム

—朝鮮を事例として—

李 守

叙事詩とは狭義には歴史、伝承、英雄伝などをつたえる長編の韻文作品である。文学がうまれるまえの太古のむかしから、それは文字を知らない詩人たちによって口誦でつたえられてきた。文学の古層には、このような文字に書かれることのない口碑の伝承がある。叙事詩はそれを語りつくすのに数日を要するほど長大でも、朗誦者は文字で読まれた作品を読むのではなく、記憶をたよりにして口頭で演じるのである。文字はむしろ記憶をさまたげるものであり、詩人は韻律や抑揚、慣用句やきまり文句を駆使して長大な作品を暗記した。『イリアス』や『オデュッセイア』に散見される「賢明なるネストール」や「知謀にゆたかなオデュッセウス」といった形容句の修飾語は、長大な叙事詩を暗記するための補助的機能をはたしている¹。

ヨーロッパでは叙事詩の口誦が中世まで行われていたものの、近代にいたると、韻文の物語がすたれて、散文の小説が流行していく。文字の知識が普及し、印刷術が発明されると、黙読の習慣がひろまった。文学は韻文から散文へと表現形式をあらためながらも、叙事詩はいまなお「口誦文学」として人びとに語りつがれている。しかし「口誦」の「文学」とは、そもそも形容矛盾であろう。あたかも文学作品が声で書かれているとも言いたげなおかしな名状である。W-J・オングは、口頭で演じ語られてきたものの遺産を「文学」とみなすのは、馬を車輪のない自動車にたとえるようなものであると揶揄する²。とはいえ、口誦によって伝承されてきた叙事詩は、いまでは文学ばかりでなく多様な文芸ジャンルに転用されている。叙事詩の多くは映画化・オペラ化され、歴史小説としても、はてはゲームとしても再生されるのである。

叙事詩はナショナリズムと親和性があり、独立国家では、英雄叙事詩が国民の文化的象徴とされる。国民を統合する原理のひとつとして「民族文化」の役割が強調され、民族文化の精華として英雄叙事詩が注目されるのである。民族を守護するため外敵とたたかう英雄叙事詩の主人公は、建設

途上にある国家では、国民を統合するための格好の「民族的象徴」とされる。旧ソ連から独立したユーラシア中央の諸国でも、『マナス』(キルギスタン)、『アルパミシュ』(ウズベキスタン)といった英雄叙事詩が国家的事業として顕彰されている。

あらゆる共同体には創造神話がつきものであり、世俗化された近代国家でも、独立運動や革命、憲法制定といった歴史とそれらを実現した人物たちが社会に記憶される。朝鮮民主主義人民共和国(以下、朝鮮)では金日成(1912-94年)が旧満洲でくりひろげた抗日パルチザン活動を政権の正当性を根拠づける歴史と解釈する。朝鮮では1958年の建国10周年を記念して、音楽舞踊叙事詩「栄光のわが祖国」が上演されたのをかわきりに、革命歌劇「血の海」「楽園の歌」など一連の作品が発表され、ひとつの文芸ジャンルとして定着した。その特徴は首領の革命史を、歌謡と舞踊によって描写する総合芸術の形式をとる点である。

この分野の確立に中心的な役割をはたしたのが、「金日成将軍の歌(1946年)」「愛国歌(1947年)」を作曲したことでも知られる金元均(1917-2002年)である。朝鮮音楽家同盟中央委員長をはじめとする、この分野の要職を歴任したかれは、戦前の日本、1950年代にはソ連にも留学し、チャイコフスキー音楽院で学んでいる。

ユーラシア大陸にひろく分布した社会主義諸国では、レーニン、毛沢東、金日成といった指導者たちを「英雄」として崇拝する叙事詩的作品がつくられた。革命の総本山であるソ連に学んだ音楽家たちが、叙事詩を国民統合のモジュールにしたたのである。「敬愛する最高指導者」のような常套句は、叙事詩に特徴的なきまり文句の残存とみなすことができるだろう。

1 W-J・オング 桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年、86-7頁。

2 同34頁。 (り すう 国際学科)